

『東文選』と崔致遠の遺文

濱田， 耕策
九州大学大学院人文科学研究院歴史学部門

<https://doi.org/10.15017/1516116>

出版情報：史淵. 152, pp.85-121, 2015-03-14. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院人文科学研究院『史淵』第百五十二輯抜刷
二〇一五年三月発行

『東文選』と崔致遠の遺文

濱
田
耕
策

『東文選』と崔致遠の遺文

濱 田 耕 策

- 一. はじめに
- 二. 『崔致遠文集』三十卷と崔致遠の遺文
- 三. 崔致遠の遺文の種々
- 四. おわりに

一. はじめに

筆者は一九七八年三月に後述する『東文選』に収められ、また『東史綱目』に編年された「謝不許北國居上表」を史料として、八九七年七月に唐の朝廷で起こった渤海国王子の大封裔が新羅国の使者との間で席次の上下を交替するように求める状の文書を進め、昭宗皇帝は新羅使が渤海使より上席である当初の座席を保たせた所謂

「争長」の事例を「唐朝における渤海と新羅の争長事件」の題目のもとに検討したことがあった。^①

その成果は幸いにも関連する分野、特に唐代の国際関係や国際秩序に関心を寄せる内外の研究者に注目され、「唐代渤海与新羅の争長事件」の題名でも中国語に翻訳されて、日・韓・中の学界に受け入れられた。^②

その時より以来、この崔致遠作の「謝不許北國居上表」の文をはじめとして、崔致遠の遺文の作品群についてその史料の保証を確認し、史料の価値を高めることの必要性を懐いていた。

そこで、まず、崔致遠の数多い作品が今日まで伝来してきた過程を史料の上から可能なかぎり追求し、新羅史研究の上で崔致遠の諸々の遺文が史料として価値の高いことを証明することを本稿の課題としたい。

二、『崔致遠文集』三十巻と崔致遠の遺文

崔致遠は新羅の憲康王十一年（八八五）三月に、在唐十八年の間に著し編集した詩文集や書簡と文書、詩を収めた書篋を携え、「淮南入本國兼送詔書等使」として新羅へ帰国した。^③翌八八六年正月にはそれら書篋中の著作を『桂苑筆耕集』二十巻に編集して、在唐の時代に既に編集していた『私詩今體賦五首』一卷、『五言七言今體詩共一百首』一卷、『雜詩賦共三十首』一卷、『中山覆篋集』一部五巻を加えた計二十八巻の著作を時の新羅の憲康王に奉進した。

その中の『桂苑筆耕集』は今日まで版を継いで確かに伝来しているが、後述するように『新唐書』芸文志に著録された『四六』一卷と『桂苑筆耕集』以外の四種の詩文集がどのように中国と韓国に伝来して、いつの頃に散逸したか、またその逸文の存在についても今日では明らかではない。

さらに、崔致遠は新羅に帰国した後、新羅政府に仕えたが、その間に新羅の真聖王が唐の皇帝に奉るいくつかの上表文起草している。このほかにも八九八年（孝恭王二年）頃に崔致遠が慶尚南道陝川郡の海印寺に隠棲し、その後に高僧伝や碑銘などを著述したが、そのいくつかの作品は今日にも伝存している。

本稿はそれら諸々の遺文の伝存過程を辿り、崔致遠の遺文の所在の実際と伝来を明らかにして、遺文が新羅の歴史と文化の研究の対象としての価値の高いことを確認するものである。

まず、高麗国王の仁宗の時代に宰相であった金富軾は仁宗の即位二十三年（一一四五年）に高麗国王の命令である「宣」を奉って『三国史記』五十巻を撰したが、その巻四十六には「崔致遠伝」を撰述して、その末尾に「又有文集三十巻、行於世」と認めた。

この「文集三十巻」とは前述したように、崔致遠が新羅帰国の翌年に編集した『桂苑筆耕集』二十巻と唐から將來した自選の四つの詩文集の計二十八巻、それに新羅政府に仕え、また海印寺に隠棲した後までの作品を加えた「三十巻」のことなのか、或いは後者のみの、即ち、『桂苑筆耕集』や四詩文集に編集されない、新羅帰国の翌年以後の作品を編集した「文集三十巻」なのか、前者の場合ならば崔致遠が新羅に帰国した後の作品は僅か二巻のみの作品となる。

崔致遠が八八五年に帰国してから後の十数年の期間を考慮すれば、その間の作品が二巻に収まるほどとは後掲する諸々の遺文の数からは考えられない。このことから「文集三十巻」とは崔致遠の新羅帰国後の作品を編集した文集であると考えられる。

『三国史記』の「崔致遠伝」には「上太師待中状」を引用して、その出典を「文集」とのみ表記する。また、『三国史記』巻十一の真聖王即位記には、「崔致遠文集第卷二」に収められたとする「謝追贈表」と「納旌節表」

の文の一部が引用されている。

同じく、『三國史記』卷十一には眞聖王が在位十年（八九六）に、太子の曉に讓位する意を「入唐し表もて奏」した表文の一部が引用されているが、この表文は後述する『東文選』卷四十三に収められた「讓位表」の一部であり、この「讓位表」も『崔致遠文集』に収められていた表文であることに違いない。

これらの事例から『三國史記』の「崔致遠伝」に「又有文集三十卷、行於世」と叙述された「文集三十卷」は『三國史記』の眞聖王即位記に引かれた『崔致遠文集』とは同一の書であると思なして間違いなく、『三國史記』が編纂された一四五年にも『崔致遠文集』三十卷は「世に行」われていたのであり、『三國史記』の編纂に活用されたと判断される。

また、『崔致遠文集』三十卷に収められた「上太師侍中状」が後述する『三國遺事』（僧一然撰、一二八五年頃）にも引用されかつ参考にされており、このことから判断すれば、同集は十二世紀半ばから十三世紀末には高麗の社会に確かに伝存していたことがわかる。

さらに、前述した「讓位表」は徐居正や梁誠之らが朝鮮朝の成宗九年（一四七八）に、新羅から高麗を経て朝鮮朝初期までの朝鮮人による名文と名詩を編纂した『東文選』にその全文が収載されており、また後掲するように『桂苑筆耕集』に編纂されない崔致遠の遺文がこの『東文選』に編纂されていることから、それらはこの『崔致遠文集』に編纂されていた作品であろうことが推察される。

かくて、『崔致遠文集』三十卷が十五世紀後半の『東文選』の編纂時代にも伝来していたことは、そこに至る次の詩文集に崔致遠の遺文が収められていることから確認される。

即ち、高麗の崔瀼（一二八七～一三四〇年）は新羅の「崔孤雲（致遠）」から高麗の「忠烈王時」までの「東

人」即ち新羅人と高麗人の文を「家蔵の文集」とその他は「人より借り」て、忠肅王五年（一三三六）に『東人之文』として編修し、同王七年（一三三八）には「東人」が著した四六駢儷体の文を増補して、『東人之文四六』を編集した。⁵この『東人之文四六』にも崔致遠が著した十三首の文を卷一「事大表状」に、また十一首の啓と状の文を卷十三「啓」に収めている。⁶

尚、「事大表状」十三首のなかに「百濟遣使朝北魏表」を崔致遠の作として編集しているのは明らかに誤っており、この誤りは『東文選』にも引き続いて見られる。この誤りは『崔致遠文集』には見られないに違はなく、崔溘の『東人之文四六』に始まるものと推測されるが、『東人之文四六』を編集するにも『崔致遠文集』三十巻が活用されたことは間違いない。

さらに、崔溘が批點を加えた新羅、高麗時代の詩文を高麗の趙云佐（一三三二～一四〇四年）が精選した『三韓詩龜鑑』にも崔致遠の作である詩の十一首が「卷之上」に、また十四首の詩が「卷之中」に収められている。⁷この『三韓詩龜鑑』巻之上では崔致遠を紹介して「字孤雲、新羅人。仕唐爲翰林侍讀學士、本集三十巻」とある。先の高麗の崔溘とこの趙云佐の二人が編集した詩文集のなかに崔致遠の詩文が編集されていることから、これらの詩文集の編纂の時代、即ち十四世紀末にも『崔致遠文集』三十巻が伝存していたことは確かである。

また、神印宗の僧である釈子山は唐の劉禹錫、白居易らの詩と新羅人では崔致遠と朴仁範、崔承祐と崔匡裕の詩に注を加えて『夾注名賢十抄詩』を編纂したが、これが朝鮮朝の端宗即位年（一四五二）に密陽府で重刊されたが、これにも後掲するように崔致遠の十首の詩を収める。その中の二首は他に見られない詩であり、注目を引いている。⁸

この高麗後期から末期に編纂された三つの詩文集に見られた崔致遠の遺文、遺詩をはじめとして、そこに編集

されていなかった多くの崔致遠の遺文と逸詩も後掲する【資料Ⅰ】に見るように、『桂苑筆耕集』所収の作品とともに前述した『東文選』にも収載されることになる。

即ち、『東文選』所収の崔致遠の遺文のなかで『桂苑筆耕集』所載の遺文を除いた作品はこの三つの詩文集とともにその初めの出典である『崔致遠文集』三十巻がその出典であると見なされる。

この『崔致遠文集』は『東文選』の編纂後にも世に伝わっており、金焦（一五九七〜？）が著した『海東文獻總録』には、崔致遠の著作として『崔氏文集』三十巻と『桂苑筆耕』二十巻、『四六集』一卷、『新羅殊異傳』、『年代曆』を掲げて、崔致遠の生涯を紹介している。

その後、安鼎福（一七二一〜一七九一年）は一七五八年に『東史綱目』の草稿を完成させたが、これには『崔致遠集』を引用書のひとつとして崔致遠の撰になる事大の表や状の文章を活用し新羅史を編纂しているが、この『崔致遠集』とは『崔致遠文集』三十巻のことと見てよい。

即ち、『東史綱目』第五上の憲康王八年（八八二）四月条には「朝唐使金直諒。謁帝于蜀」との綱目を掲げて、「崔致遠集補」とその出典を提示して、「上太師侍中状」の一文を引用しており、前述した「上太師侍中状」が『崔致遠文集』に収められていたことがここでも確認される。

また、憲康王十一年（八八五）三月条には「以崔致遠、爲侍讀翰林學士」に続いて崔致遠の略史と「遣崔愼之等。入學于唐」の綱目を掲げて、「崔致遠集參補」と出典を示している。その文は崔致遠の撰になる「遣宿衛學生首領等入朝状」とまた『高麗史』卷九十二の「崔彥搆」伝に依拠しているから、「遣宿衛學生首領等入朝状」が『崔致遠文集』に収められていたこととなる。「遣宿衛學生首領等入朝状」は『東人之文四六』卷一の「事大表状」にも収められていたから、『東人之文四六』は『崔致遠文集』の作品を引いたことがやはり確認されるこ

ととなる。

さらに、『東史綱目』第五上の真聖王元年（八八七）には真聖王の即位記事のなかで、王の諱を「曼」と掲げて「崔致遠集曼作坦」と注記している。この注記は「謝嗣位表」、或いは『三國史記』の真聖王の即位記に引用された「崔致遠文集第二卷、謝追贈表」に依拠していることとなる。

また、同真聖王三年（八八九）条には「遣崔承祐、入學于唐」の綱目を掲げて「崔致遠集補」と出典を示す。この崔承祐の入唐記事では入唐学生を列記するが、その情報源は崔致遠の撰になる「遣宿衛學生首領等入朝状」と「奏請宿衛學生還蕃状」であることから、あらたに「奏請宿衛學生還蕃状」も『崔致遠文集』に収められていたこととなり、また『東人之文四六』にも収められていたから、『東人之文四六』が『崔致遠文集』の作品を引いたことがまた確認されることとなる。

同じく、『東史綱目』第五上の真聖王七年（八九三）条にも「朝唐使金處誨。没于海」の綱目を掲げて「崔致遠集補」と出典を提示しているが、その根源は前述した「上太師侍中状」である。

さらに、『東史綱目』第五下の孝恭王元年（八九七）六月条には「女主傳位于曉。曉即位。遣使入告于唐」と掲げて「崔致遠集參補」と出典を示す。そこに引用された崔致遠の文は「讓位表」と「謝嗣位表」である。

同七月条には「唐冊贈景文王憲康王。王遣使入朝」と掲げて「崔集補」と出典を略記して示すが、その文は「謝恩表」であり、これに続いて渤海王子の大封裔による新羅使との争長を掲げて「崔致遠集補」と示すが、その文は「謝不許北國居上表」であり、これらの表も『崔致遠文集』に収められていたことが知られる。

また、同孝恭王二年（八九八）同十一月条には「阿滄崔致遠。有罪免」と掲げて、崔致遠の晩年を述べ、「所著文集三十卷、行於世」とも述べている。このことは前述した金休の『海東文献總録』が『崔氏文集』三十巻を

掲げた記録にも通ずるが、「所著文集三十卷、行於世」との文脈は、『三国史記』卷四十六の崔致遠伝に「又有文集三十卷、行於世」と著した字句を踏襲した語句とも考えられるが、この十八世紀の安鼎福の時代にも十五世紀後半の『東文選』編纂の時代に確かに存した『崔致遠文集』三十卷が版を継いで伝存していた可能性は十分にあると考えられる。

ただ、安鼎福は『東史綱目』を編集するに当たっては、上記の計八首の崔致遠の事大の表や状を活用するとき、『崔致遠文集』に選らさずに、『東文選』に所収のものに依拠したとも考えられる余地もあるが、『東史綱目』では「崔致遠集補」や「崔致遠集參補」、「崔集補」とその出典を明記していることから、これに従うべきであって、やはり安鼎福の時代にも『崔致遠文集』三十卷は伝存していたと見るべきであろう。

ところで、前述したように、『東史綱目』卷五上の憲康王十一年（八八五）三月条に、「以崔致遠。爲侍讀翰林學士」との記事に連続して崔致遠の伝記を述べていた。ここでは友人の顧雲が新羅に帰国する崔致遠に「孤雲篇」の詩を賦して贈ったことを紹介している。

即ち、その詩とは「引風離海上。伴月到人間。徘徊不可從。漫漫又東還」「十二乗舟渡海來。文章憾動中華國。十八橫行戰詩苑。一箭射破金門策」の詩であり、これに続いて、「致遠亦自叙云。巫峽重峰之歲。絲入中華。銀河列宿之年。錦還東國」との崔致遠の「自叙」の一節をも紹介している。

この崔致遠の「自叙」の一節にある「巫峽重峰之歲」とは長江の流れに迫る巫峽を臨む「巫山十二峰」に因んで十二歳の年を、また「銀河列宿之年」とは「二十八宿」の意から二十八歳を意味する。崔致遠が十二歳で入唐して、二十八歳で帰国したことを「絲が中華に入り」、「綿となって新羅に還った」と譬えるこの自負は『桂苑筆耕集』の「序」には著されてはいない感興である。

この崔致遠の「自叙」は憲康王十一年（八八五）三月に崔致遠が新羅に帰国した後のものであることは確かであり、またこの「自叙」を引く『東史綱目』は「崔致遠文集」を引用していたことから、この「自叙」は『崔致遠文集』のものということになろう。すると、「崔致遠文集」は崔致遠が自ら編んだ文集であることも推測される。さて、安鼎福より早い李暉光（一五六三～一六二八年）は朝鮮王朝の光海君六年（一六一四）に『芝峯類説』を著述したが、その卷十三の文章部六・東詩の部には「智異山。有一老髡。於山石窟中。得異書累帙。其中有崔致遠所書詩一帖十六首。今逸其半。求禮倅閔君大倫。得之以贈。余見其筆跡則眞致遠筆而詩亦奇古。其爲致遠所作無疑。甚可珍也」と述べて、智異山の石窟の中から得た崔致遠の作であると伝わる「一帖十六首」の詩のなかから後掲する八首の詩を著録している。

この八首は『芝峯類説』に先行する『東文選』には後掲する【資料Ⅰ】に見るように編集されていないが、『崔致遠文集』に編集されていたかどうか、確認できない。その智異山の石窟から得たという伝聞から崔致遠の作品かどうか、李暉光は崔致遠の作と判断するが、これには文学的な検討が必要であろう。

尚、『芝峯類説』卷十三・文章部六・東詩にはこの八首の詩に続いて、「伽椰山石負庵巖石上。有刻詩曰新羅末裔愛丘山。深鎖雲林不出寰。三見仙桃花結子。笑他人老百年間。傳者疑爲崔致遠之作。然詩格不近似矣。末裔。蓋猶言末世也」とあって、崔致遠の作かと伝わる石刻された詩を掲げているが、李暉光がこの詩については崔致遠の詩としては似つかわしくない（「詩格不近似矣」と判断しているように、崔致遠の作ではなからう）。

その後、近代に至っては、崔致遠の後孫の崔国述が、一九二六年に『東文選』の中から『桂苑筆耕集』に編まれた詩文を除く崔致遠の詩文五十二の作品とともに「四山碑銘」を加えて『孤雲先生文集』三巻を編集しているが、その巻一「賦」に掲げられた「詠曉」の出典については確認できない。

また、一九七二年には成均館大東文化研究院が『崔文昌侯全集』を刊行するに際して、この『孤雲先生文集』と『桂苑筆耕集』に加えて、『孤雲先生続集』を新たに編集しているが、これには後述する仏国寺と海印寺の古籍に伝わる崔致遠の遺文等と前述した『夾注名賢十詩抄』から六首の詩を収めている。

三、崔致遠の遺文の種々

崔致遠の作品については早く『新唐書』卷六十・芸文志四に「崔致遠四六 一巻、又桂苑筆耕 二十巻高麗人、賓貢及第、高駢淮南從事」とあって、『新唐書』の編纂がなった北宋の嘉祐五年（一〇六〇）には中国ではこの二書が伝存していたが、今日では『四六』一巻は伝存せず、『桂苑筆耕』二十巻が中国と韓国で刊行され続けて、その版本は日本にも広く伝存している。¹⁰⁾

前述のように、崔致遠は新羅に帰国した翌年の八八六年正月に在唐中に著した詩文を『桂苑筆耕集』に編んで、時の新羅国王の憲康王に「奉進」したが、これが唐末の中国に渡っていたわけである。さらに在唐中に編んでいた『私試今體賦五首』一巻、『五言七言今體詩共一百首』一巻や『雜詩賦共三十首』一巻、『中山覆篋集』一部五巻の四部の詩文集は今日では中国と韓国に存しない。この四部の詩文集に編集された詩文は逸文や逸詩としても明確には知られてはいない。

ところで、大江維時が天曆年間（九四七～九五七）に撰集した『千載佳句』には後掲するように、崔致遠が詠った七言詩の九首が収載されている。この九首の詩は『桂苑筆耕集』や『東人之文四六』、『三韓詩龜鑑』、さらには『東文選』にも崔致遠の遺文としては編集されていない孤立した、即ち、伝存の系統を別にする詩であ

る。この詩には新羅の自然や風俗、新羅人の知遇などが詠われていないばかりか、唐の都の洛陽を思わせる詩句であることから、崔致遠の在唐時代の作品であることは間違いないであろう。¹²⁾

そうであれば、崔致遠が『桂苑筆耕集』の序で「尋に浪跡東都、筆作飯囊、遂有賦五首、詩一百、雜詩賦三十首、共成三篇、爾後調授宣州溧水縣尉、祿厚官閒、飽食終日、仕優則學、免擲寸陰、公私所爲、有集五卷、益勵爲山之志、爰標覆簣之名、知號中山、遂冠其首」と『中山覆簣集』五卷に至る詩文集を編んだ背景を述べているが、伝存しない在唐時代の詩と賦を編んだこれらの四種の詩文集のなかに、この九首の詩が編集されていたのであろうか。

ただ、崔致遠は前記の四詩文集を編む前に在唐初期の作品については、『桂苑筆耕集』の序のなかで、「觀光六年。金名榜尾。此時、諷詠情性。寓物名篇。曰賦曰詩。幾溢箱篋。但以童子篆刻。壯夫所慙。及忝得魚。皆爲棄物」などと、廃棄したと述べていたことにも注意したい。¹³⁾

さらに、藤原佐世は八九一年頃に日本に所在した漢籍の目録を『日本国見在書目録』として編集したが、ここには崔致遠の詩文集は著録されていなかった。このことを考えると、『千載佳句』に書き留められた崔致遠の九首の漢詩は、大江維時が「佳句」として認めるまでに、いつ、どのようにして、またどのような形態で日本に伝来したのか、関心を惹く問題である。同じく『千載佳句』には新羅人では金立之の詩の七首、金雲卿の詩の一首、金可記の詩の一首も載せており、これらの詩の伝来の経緯も今後にも解明すべき課題として残っている。¹⁴⁾

また、前述したように、崔致遠が八八五年三月に新羅に帰国した以後の作では、『三国史記』卷十一の眞聖王即位年（八八七年）条には『崔致遠文集』第二巻に収められた「謝追贈表」と「納旌節表」の一部が引用されており、また、同十一年（八九七年）六月条に王位を太子の嶢に讓位する旨を入唐して表奏する記事には「讓位

表」の一部が引用されていた。

さらに、『三国史記』卷三十二・樂志には崔致遠作の「郷樂雜詠五首」が掲げられており、同じく『三国史記』卷四十六の崔致遠伝には「上太師侍中状」が引用されていた。同卷四の智證麻立干即位年（五〇〇年）条の「論」では、金富軾は崔致遠撰の『帝王年代曆』について、「皆稱某王不言居西干等、豈以其言鄙野不足稱也」と論じており、『帝王年代曆』が新羅に帰国した以後の著作であり、高麗の金富軾の時代にも伝存していたことが知られる。

崔致遠が「居西干」等の新羅固有の王号を『帝王年代曆』のなかで書き留めていないことを中国史書が楚や匈奴の固有の語音を「穀於菟」や「撐犁孤塗」と漢字表記して記録に留めた例と比較して、崔致遠が『帝王年代曆』では「王」とのみ表記したことを金富軾は「新羅事、其存方言宜矣」と惜しんでいるのである。

さらに、『三国史記』卷四の真興王三十七年（五七六年）春の条では崔致遠の作品として、花郎の社会的かつ精神的な性格を述べた『鸞郎碑序』の一部を引用している。

これら崔致遠の「文集」三十卷に収められた作品やこれと伝来の系統を異にする崔致遠の作品群から崔致遠が著した文学作品の質とその性格を理解することが可能となる。

続いて、高麗時代の一二八五年（忠烈王十一年）頃に僧一然が私撰した『三国遺事』巻一の「馬韓」と「卜韓・百濟」条からも「上太師侍中状」の一文である「馬韓則高麗。卜韓則百濟。辰韓則新羅」の字句が、また同じく「第二 南解王」条には、前述した『三国史記』智証麻立干の即位記と同じく、『帝王年代曆』が固有の新羅の王号を採用していないことを惜しむ記事を伝えている。

さらに、『三国遺事』巻一の「太宗春秋公」条の記述からは、新羅の風俗に「正月の忌日は上亥・上子・上午

の日とする」ことは崔致遠の説であるとすると記事や、同卷二の「後百濟甄萱」条からは、天成二年（九二七）正月に高麗の太祖の王建が後百濟王の甄萱に送った書は崔致遠の作であるとの記事も伝えており、『東文選』卷五十七「書」には「代高麗王答甄萱書」を収め、この作者は「無名氏」としているが、崔致遠の作に当たるかどうか、検討が求められることとなる。

これに先だつて、崔致遠は高麗の太祖王建の書に依えて「鷄林黄葉、鵠嶺青松」の句を王建に贈ったとのエピソードも『三国史記』卷四十六の崔致遠伝に記録されている。

これら『三国史記』と『三国遺事』にその一部が記録され、また前述した詩文集に編集された崔致遠の作品のほかにも、これらとは伝来を異にする崔致遠が表した仏教関係の作品では、高麗の大覚国師義天（一〇五五—一〇一年）が著した『新編諸宗教藏総録』からは『賢首傳』一卷（後述の「唐大薦福寺故寺主翻經大德法藏和尚傳」一卷）と『浮石尊者傳』一卷の書名も知られ、それが崔致遠の著作であることが知られる。⁶⁾

同じく義天が著した『圓宗文類』からは、「大華嚴宗佛國寺阿彌陀像讚并序」、「王妃金氏爲奉爲先考及亡兄道福施設願文」と「故終南山華嚴大宗主儼和尚社會文」が崔致遠の作であることが知られる。⁷⁾

また、現存する碑銘では、『有唐新羅國故知異山雙溪寺教諭眞鑑禪師碑銘并序』（八八七年建立、慶尚南道河東郡花開面雲樹里雙溪寺）、『有唐新羅國故兩朝國師教諭大朗慧和尚白月葆光之塔碑銘并序』（八九〇年頃建立。忠清南道保寧郡崙山面聖住里聖住寺址）、『大唐新羅國故鳳巖山寺教諭智証大師寂照之塔碑銘并序』（九二四年建立。慶尚北道聞慶郡加恩面院北里鳳巖寺）の三碑銘はそれぞれ、「前西國都統巡官承務郎侍御使史内供奉賜紫金魚袋臣崔致遠奉教撰」、「淮南入本國送國信詔書等使前東面都統巡官承務郎侍御使内供奉賜紫金魚袋臣崔致遠奉教撰」、「入朝賀正兼迎奉皇花等使前守兵部侍郎充瑞書院學士賜紫金魚袋臣崔致遠教撰」と撰者の崔致遠の官歴が銘記さ

れており、崔致遠の撰述であることが知られる。

このなかで、『有唐新羅國故知異山雙溪寺教諭眞鑑禪師碑銘并序』は前述した『芝峰類説』卷十八の「禪門」には、「師俗姓崔氏。其先漢族。隋師征遼。沒於驪貊」、「禪師形貌黯然。衆號黑頭陀」と銘文が短く引用されており、李暉光が眞鑑禪師碑かその拓本を実見していたことが知られる。

さらに、崔致遠が撰述した『有唐新羅國初月山大高福寺碑銘并序』（八九六建立。寺址は慶尚北道月城郡外斗面末方里）は破壊されており、今日ではその僅かな碑片が知られるのであるが、幸いにも破壊される前に拓出されて、碑銘は写本で伝わっている。¹⁸⁾

これら崔致遠が撰述した所謂「四山碑銘」とともに、そのひとつであり前述した『有唐新羅國故知異山雙溪寺教諭眞鑑禪師碑銘并序』に記された注からは、崔致遠が「中興功德頌」一卷を新羅の定康王元年（八八六年）に著していたことも知られる。¹⁹⁾

また、天理図書館蔵の『伽倻山海印寺古籍』（天福八年（九四三）癸卯十月依板成籍）には「狂奔壘石吼重巒、人語難聞咫尺間、常恐是非聲到耳、故教流水盡籠山」の七言絶句が崔致遠の作として掲載されており、後に『孤雲先生文集』巻一に「題伽倻山讀書堂」として編集されている。²⁰⁾

同古籍には「唐光化三禩（九〇〇）」に記された「内供奉兼翰林學士承務郎前守兵部侍郎權知瑞書監事賜紫金魚袋崔致遠撰」の「海印寺善安住院壁記」を編集している。

さらに、「順應和尚讚」と「利貞和尚讚」を、また「希朗大德君」が「伽倻山海（印）寺」で華嚴経を講じたことに応じて吟詠した七言絶句の六句を「防虜大監天嶺郡守遏祭崔致遠」の作として載せるが（希朗大德君夏日於伽倻山海寺講華嚴經僕以捍虜所拘莫能□聽一吟一咏五側五平十絶成章歌頌其事）、この三作品は『孤雲先生文

集』に収められ、後者は「贈希明和尚」として載せられている。

また、一五三〇年に編纂された『新增東國輿地勝覽』卷二十九・高靈縣の「建置沿革」条には前述した「釋利貞傳」を掲げて伽倻山神の誕生を、また「釋順應傳」を掲げて「大伽倻國月光太子」の由来を簡略に述べている。

さらに、『新羅國東吐含山華嚴宗佛國寺事蹟』（慶歴六年（一〇四六）丙戌二月日國尊曹淳宗圓鏡沖照大禪師一然撰、康熙四十七年（一七〇八）戊子八月日改刊繼天謹書校正載肅）²¹には「毘盧佛并二菩薩像讚并序」（都統巡官崔致遠撰）と「阿彌陀佛像讚并序」（桂苑行人崔致遠撰）、さらに「釋迦如來像幡讚并序」（賜紫金魚袋崔致遠撰）が編纂されており、その撰者の記名からこの三作が崔致遠の作であることが知られる。

また、康熙三十五年（朝鮮の肅宗二十二年康熙丙子・一六九六）仲春に性聰が編んだ『智異山華嚴寺事蹟』にもこの三作を「崔致遠所撰」として所載し、さらに、「爲故昭義僕射齋詞」（中和二年（八八二）七月二十三日）、「同前詞」（中和二年（八八二）七月二十七日）、「海東浮石尊者義湘諱日文」（撰文の年月の表記はなし）、「故翻經證義大德圓測和尚諱日文」（撰文の年月の表記はなし）の四件と「奉爲憲康大王結華嚴經社願文」と「王妃金氏奉爲先考及亡兄追福施穀願文」の二件の願文を崔致遠の作品として編集している。

この二つの詞は『桂苑筆耕集』卷十五の「爲故昭義僕射齋詞二首」を引いており、「讚并序」の三作と後者の二つの願文と「諱日文」は『孤雲先生續集』に載せられる。

また、『佛國寺古今歷代記』（朝鮮の英祖十六年、一七四〇年）にも、前述の『新羅國東吐含山華嚴宗佛國寺事蹟』に記録された「毘盧佛并二菩薩像讚并序」が「大華嚴宗佛國寺毘盧遮那文殊普賢像讚并序」（光啓丁未正月八日（八八七年）桂苑行人崔致遠撰）として、また「阿彌陀佛像讚并序」が「大華嚴宗佛國寺阿彌陀佛像讚并序」（同年月日、紫金魚袋崔致遠撰）として、さらに「釋迦如來像幡讚并序」が「王妃金氏爲考繡釋迦如來像幡

讀并序」(中和六年(八八六)丙午相月日、桑丘使者崔致遠撰)として、撰者である崔致遠の表記を変えて編集されている。

さらに、この『佛國寺古今歴代記』にはこの三件の「讀并序」のほかに、前述した『智異山華嚴寺事蹟』に所収された二件の「願文」が「羅朝上宰國戚大臣等奉爲獻康大王結華嚴經社願文」(中和二年(八八二年)、桂苑行人崔致遠撰)と「王妃金氏奉爲先考及亡兄追福施穀願文」(中和丁未年(八八七年)暢月富城太守崔致遠)として編集されており、前者の三件の「讀并序」のなかの前者の二件は「東祖碑文」を出典として、後の二件の願文は「東国僧史碑」を出典とすることが記録されており、この五つの作品が崔致遠の著作であることが前記した括弧内の撰者の表記から知られ、現代の『孤雲先生続集』に編集されることになる。

また、近代に編集された『大正新脩大藏經』第五十卷・史伝部二(一九二七年一月)には前述した「賢首傳」(唐大薦福寺故寺主翻經大德法藏和尚傳)が崔致遠の著作として収められ、『孤雲先生續集』に編まれている。

以上の作品のなかには崔致遠の真作か、崔致遠に仮託した作品であるかについて検証を加えなければならない作品もあるが、これら崔致遠の作品を『崔致遠文集』三十巻に所収されたことが判断される伝存された作品群〔A〕と、また、その他では今日では伝存するか〔B〕、非伝存〔C〕かに分けて、その所載の文献をも列記すれば下記のようなのである。

〔A〕『崔致遠文集』に編集されたと判断される伝存する作品〔桂苑〕は『桂苑筆耕集』を出典とすることを、「↓『東文選』①」は『東文選』巻二に、「↓『東綱』」は『東史綱目』に、「↓『孤雲』②」は『孤雲先生文集』(一九二六年・崔国述編)巻二に、「↓『孤続』③」は『孤雲先生続集』(一九七二年七月、成均館大学校大東文

化研究院」卷三に編集された作品であることを示す)

① 『三国史記』に引用された作品

○上太師侍中状(↓『東綱』、↓『孤雲』①)

○謝追贈表(↓『東綱』)

○納旌節表

○讓位表(↓『東綱』)

○「鄉樂雜詠五首」(『三国史記』卷三十二・樂志)

・金丸・廻身掉臂弄金丸、月轉星浮滿眼看。縱有宜僚那勝此、定知鯨海息波瀾。

・月顛・肩高項縮髮崔嵬、攘臂羣儒鬪酒盃。聽得歌聲人盡笑、夜頭旗幟曉頭催。

・大面・黃金面色是其人、手抱珠鞭役鬼神。疾步徐趨呈雅舞、宛如(丹)鳳舞堯春。

・束毒・蓮頭藍面異人間、押隊來庭學舞鸞。打鼓冬冬風瑟瑟、南奔北躍也無端。

・狻猊・遠涉流沙萬里來、毛衣破盡着塵埃。搖頭掉尾馴仁德、雄氣寧同百獸才。

② 『東人之文四六』卷一「事大表狀」に所収の作品

○「新羅賀正表」(↓『東文選』③1)

○起居表(↓『東文選』③9、↓『孤雲』①)

○讓位表(↓『東文選』④3、↓『東綱』、↓『孤雲』①)

○謝嗣位表(↓『東文選』③3、↓『東綱』、↓『孤雲』①)

- 謝恩表（↓『東文選』³³、↓『東綱』、↓『孤雲』^①）
- 謝賜詔書函表（↓『東文選』³³、↓『孤雲』^①）
- 謝不許北國居上表（↓『東文選』³³、↓『東綱』、↓『孤雲』^①）
- 遣宿衛學生首領等入朝狀（↓『東文選』⁴⁷、↓『東綱』、↓『孤雲』^①）
- 奏請宿衛學生還蕃狀（↓『東文選』⁴⁷、↓『東綱』、↓『孤雲』^①）
- 「百濟遣使朝北魏表」（↓『東文選』³⁹、↓『孤雲』^①）
- 新羅王與唐江西高大夫湘狀（↓『東文選』⁴⁷、↓『孤雲』^①）
- 與禮部裴尚書瓚狀（↓『東文選』⁴⁷、↓『孤雲』^①）
- 與青州高尚書狀（↓『東文選』⁴⁷、↓『孤雲』^①）
- 同卷十三「狀・啓」に所収の作品
- 上襄陽李相公讓館給啓（↓『東文選』⁴⁵）
- ③『三韓詩龜鑑』卷之上に所収の作品
 - 「寓興」（↓『東文選』⁴、↓『孤雲』^①）
 - 「蜀葵花」（↓『東文選』⁴、↓『孤雲』^①）
 - 「江南女」（↓『東文選』⁴、↓『孤雲』^①）
 - 「古意」（↓『東文選』⁴、↓『孤雲』^①）
 - 「長安旅居與于慎微長官接隣有奇」（↓『東文選』⁹、↓『孤雲』^①）

- 「贈雲門蘭若智光上人」(↓『東文選』⑨、↓『孤雲』①)
- 「題雲峯寺」(↓『東文選』⑨、↓『孤雲』①)
- 「旅遊唐城有先生樂官將西歸夜吹數曲戀因悲泣以詩贈之」(↓『東文選』⑨、↓『孤雲』①)
- 「秋夜雨中」(↓『東文選』⑱、↓『孤雲』①)
- 「郵亭夜雨」(↓『東文選』⑱、↓『孤雲』①)
- 「重遊福興寺」
- 同卷之中に所収の作品
- 「登潤州慈和寺上房」(↓『東文選』⑫、↓『孤雲』①)
- 「秋日再經盱眙縣寄李長官」(↓『東文選』⑫、↓『孤雲』①)
- 「送進士吳巒歸江南」(↓『東文選』⑫、↓『孤雲』①)
- 「春晚偶書」(↓『東文選』⑫、↓『孤雲』①)
- 「暮春即事和顧雲友使」(↓『東文選』⑫、↓『孤雲』①)
- 「陳情上大尉」(「桂苑」⑳、↓『東文選』⑫)
- 「途中作」(↓『東文選』⑱、↓『孤雲』①)
- 「饒州鄱陽亭」(↓『東文選』⑱、↓『孤雲』①)
- 「山陽與鄉友話別」(↓『東文選』⑱、↓『孤雲』①)
- 「題芋江驛亭」(↓『東文選』⑱、↓『孤雲』①)
- 「春日邀知友不至回寄絕句」(↓『東文選』⑱、↓『孤雲』①)

- 「留別西原金少尹峻」(↓『東文選』19、↓『孤雲』①)
- 「贈金川寺主人」(↓『東文選』19、↓『孤雲』①)
- 「贈梓谷蘭若獨居僧」(↓『東文選』19、↓『孤雲』①)

④『夾注名賢十抄詩』に所収の作品

- ・登潤州慈和上房(↓『東文選』12、↓『孤雲』①)
- ・和李展長官冬日遊山寺(↓『孤統』)
- ・汴河懷古(↓『孤統』)
- ・友人以毬杖見惠以寶刀爲答(↓『孤統』)
- ・辛丑年書事寄進士吳瞻(↓『孤統』)
- ・和友人春日遊野亭(↓『孤統』)
- ・和顧雲侍御重陽詠菊
- ・和顧雲支使暮春即事(↓『東文選』12、↓『孤統』)
- ・和進士張喬村居病中見寄(↓『東文選』12、↓『孤雲』)
- ・酬楊瞻秀才(『桂苑』20、↓『東文選』12)

〔B〕現存する崔致遠の作品

- ①『桂苑筆耕集』二十卷

◎以下の四点は「四山碑銘」と総称

②『有唐新羅國故知異山双溪寺教誡眞鑑禪師碑銘』（↓『孤雲』②）

③『有唐新羅國故両朝國師教誡大朗慧和尚白月葆光之塔碑銘』（↓『孤雲』②）

④『大唐新羅國故鳳巖山寺教誡智証大師寂照之塔碑銘』（↓『孤雲』③）

⑤『有唐新羅國初月山大嵩福寺碑銘』（↓『孤雲』③）

⑥『圓宗文類』に所収の作品

○「大華嚴宗佛國寺阿彌陀像讚并序」（↓『孤統』）

○「王妃金氏爲奉爲先考及亡兄追福施穀願文」（↓『孤統』）

○「故終南山華嚴大宗主儼和尚社會文」（↓『孤統』）

⑦『芝峯類說』卷十三・文章部六・東詩に所収の作品

・「東国花開洞、壺中別有天、仙人推玉枕、身世歎千年」

・「萬壑雷聲起、千峯雨色新、山僧忘歲月、唯記葉間春」

・「雨餘多竹色、移坐白雲開、寂寂因忘我、松風枕上來」

・「春來花滿地、秋去葉飛天、至道離文字、元來在目前」

・「澗月初生處、松風不動時、子規聲入耳、幽興自應知」

・「擬說林泉興、何人識此機、無心見月色、默默坐忘歸」

・「密旨何勞舌、江澄月影通、長風生萬壑、赤葉秋山空」

・「松上青蘿結、澗中流白月、石泉吼一聲、萬壑多飛雪」

⑧大江維時撰『千載佳句』に所収の作品

・「四時部・春興」煙低紫陌千行柳 日暮朱樓一曲歌
 ・「四時部・秋興」芙蓉零落秋池雨 楊柳蕭疎曉岸風
 ・「地理部・山水」洛水波聲新草樹 嵩山雲影旧樓臺
 ・ 畫角聲中朝暮浪 青山影裡古今人
 ・「人事部・兄弟」雲布長天龍勢逸 風高秋月雁行齊
 ・「人事部・閑放」神思只勞書卷上 年光任過酒盃中
 ・「宴喜部・春宴」風遞鶯聲喧座上 日移花影倒林中
 ・「遊放部・春遊」芳園醉散花盈袖 幽徑吟歸月在帷
 ・「別離部・水行」極目遠山煙外暮 傷心歸棹日邊遲

⑨『伽椰山海印寺古籙』（天福八年〔九四三〕癸卯十月依板成籙）に所収の作品

○七言絶句「狂奔疊石吼重巒、人語難聞咫尺間、常恐是非聲到耳、故教流水盡籠山」(↓『孤雲』①)

○「海印寺善安住院壁記」(↓『孤雲』①)

○「順應和尚讚」(↓『孤雲』③)

○「利貞和尚讚」(↓『孤雲』③)

○「希朗大德君夏日於伽椰山海寺講華嚴僕以捍虜所拘莫能□聽一吟一咏五側五平十絕成章歌頌其事」七言絕句六種（↓『孤雲』①では「贈希朗和尚」）

⑩『新羅國東吐含山華嚴宗佛國寺事蹟』（慶歴六年〔一〇四六〕圓鏡冲照大禪師一然撰）に所収の作品

○「毘盧佛并二菩薩像讚并序」（『佛國寺古今歴代記』所載の「大華嚴宗佛國寺毘盧遮那文殊普賢像讚并序」、↓『孤統』）

○「阿彌陀佛像讚并序」（『佛國寺古今歴代記』所載の「大華嚴宗佛國寺阿彌陀佛像讚并序」、↓『孤統』）

○「釋迦如來像幡讚并序」（『佛國寺古今歴代記』所載の「王妃金氏爲考繡釋迦如來像幡讚并序」、↓『孤統』）

⑪『智異山華嚴寺事蹟』（一六九六年・柏庵道人性聡）に所収の作品

○「毘盧遮那并二菩薩（大華嚴宗佛國寺毘盧遮那文殊普賢像讚并序）」（↓『孤統』）

○「阿彌陀佛像讚并序（大華嚴宗佛國寺阿彌陀佛像讚并序）」（↓『孤統』）

○「繡釋迦如來像幡讚并序（王妃金氏爲考繡釋迦如來像幡讚并序）」（↓『孤統』）

○「奉爲獻康大王結華嚴經社願文（羅朝上宰國戚大臣等奉爲獻康大王結華嚴經社願文）」（↓『孤統』）

○「王妃金氏奉爲先考及亡兄追福施穀願文」（↓『孤統』）

（以上は『佛國寺古今歴代記』にも所収）

○「爲故昭義僕射齋詞」（『桂苑』⑮）

○「同前詞」（『桂苑』⑮）

- 「海東浮石尊者義湘諱日文」(↓『孤統』では、「海東華嚴初祖忌晨願文」)
- 「故翻經證義大德圓測和尚諱日文」(↓『孤統』)
- ⑫『佛國寺古今歷代記』(一七四〇年)に所収の作品
- 「大華嚴宗佛國寺毘盧遮那文殊普賢像讚并序」(↓『孤統』)
- 「大華嚴宗佛國寺阿彌陀佛像讚并序」(↓『孤統』)
- 「王妃金氏爲考績釋迦如来像瞻讚并序」(↓『孤統』)
- 「羅朝上宰國戚大臣等奉爲獻康大王結華嚴經社願文」(↓『孤統』)
- 「王妃金氏奉爲先考及亡兄追福施穀願文」(↓『孤統』)
- ⑬『大正新脩大藏經』(一九二七年)に所収の作品
- 「唐大薦福寺故寺主翻經大德法藏和尚傳」(「賢首傳」) 一卷(『大日本統藏經』第一輯第二編「支那撰述・史伝部」所収↓『孤統』)
- ⑭「詠曉」(『孤雲』①)
- ⑮「泛海」(『孤雲』①)
- ⑯「題輿地圖」(『孤雲』①)
- 【『孤雲先生文集』と『孤雲先生統集』に編集されるが出典の未確認の作品】

- ⑬ 「姑蘇臺」(『孤雲』①)
- ⑭ 「碧松亭」(『孤雲』①)
- ⑮ 「寄顯源上人」(『孤雲』①)
- ⑯ 「馬上作」(『孤統』)
- ⑰ 「海印寺妙吉祥塔記」(『孤統』)

【C】伝存しない作品

- ① 『私試今體賦五首』一卷
- ② 『五言七言今體詩共一百首』一卷
- ③ 『雜詩賦共三十首』一卷
- ④ 『中山覆篋集』一部五卷
- ⑤ 「中興功德頌」一卷
- ⑥ 『浮石尊者傳』一卷(義天撰『新編諸宗教藏總錄』に名のみ)
- ⑦ 『新羅殊異傳』
- ⑧ 鸞郎碑序(『三國史記』卷四・新興王三十七年条に逸文)
- ⑨ 「時務一十餘條」(『三國史記』卷十一・真聖王八年)²³⁾
- ⑩ 『帝王年代曆』
- ⑪ 『靈遊畫像讚十六句』²⁴⁾

- ⑫ 「釋利貞傳」(『新增東國輿地勝覽』卷二十九・高靈縣条に逸文)
 ⑬ 「釋順應傳」(『新增東國輿地勝覽』卷二十九・高靈縣条に逸文)

【崔致遠の作品と誤伝されるもの】

- ① 「百濟遣使朝北魏表」
 ② 『經學隊仗』⁽²⁵⁾

四. おわりに

崔致遠が新羅の憲康王十一年(八八五)に新羅に帰国した後に、新羅政府に仕えた時代とその後、新羅政府に仕えた時代に伽耶山海印寺に隠棲した間に起草した各種の文書や賦した詩文などの多くは崔致遠が自ら編集したと推察された『崔致遠文集』三十巻に収められたが、それは金富軾らが『三国史記』を編纂した高麗・仁宗二十三年(一一四五)以後にも伝存していたことは確かである。

この『崔致遠文集』はその後、高麗後期の崔漣(一二八七〜一三四〇年)が新羅の崔致遠から高麗の忠烈王代に至るまでの名賢の文を集めて、忠肅王七年(一三三八年)に編纂した『東人之文四六』十五巻にも活用されていた。

同じく、崔漣が批點を加え、趙云佐(一三三二〜一四〇四年)が精選した『三韓詩龜鑑』の「卷之上」と「卷之中」にも崔致遠が新羅に帰国した後の作詩であろうと作風から推測される二十五首が確認されたが、この内の

二十四首は『桂苑筆耕集』に編集されていないこと、また、この『三韓詩龜鑑』には崔致遠を「字孤雲、新羅人。仕唐爲翰林侍讀學士、本集三十卷」と紹介するから、『崔致遠文集』三十卷は高麗後期にも伝来していたことは確かである。

さらに、『東文選』の編纂時（朝鮮の成宗九年・一四七八年）とまた徐居正等が撰した『東国通鑑』（成宗十五年・一四八四年）には卷十一の「真聖王八年春二月、崔致遠進時務十餘條」の項に「所著文集二十卷行於世」とあり、さらに前述した金佺が著した『海東文献總録』（仁祖十四年・一六三七年）を経て、十八世紀半ばの安鼎福（一七二二～一七九二）が編纂した『東史綱目』や韓致淵（一七六五～一八一四年）が『海東繹史』（一八一四年頃の撰述）を著した頃までにも崔致遠の文集は「有集三十卷、行於世」（『海東繹史』卷第六十七・人物考）と記されているように伝存していたことが記されている。

そこで、次に掲げる【資料Ⅰ】のなかで、『東文選』所収の多くの崔致遠作品から『桂苑筆耕集』所収の作品を除いた遺文は『三韓詩鑑』や『東人之文四六』に引かれた作品であり、また『東文選』卷十五に収められた『黃山江臨鏡臺』と『題伽耶山讀書堂』に見られるように、前掲した『三韓詩鑑』や『東人之文四六』に引かれていない作品もあり、これらは『崔致遠文集』三十卷に収められた崔致遠の作であった可能性が高くなる。

また、『四山碑銘』や海印寺と佛國寺及び華巖寺の古籍に収められた「讀并序」も『崔致遠文集』に編集されていたかと推測されるが、ここに確認され、また推定された『崔致遠文集』所載の遺文はその三十卷という分量からは決して多くはない。

かくて「謝不許北國居上表」が『東人之文四六』を介して『崔致遠文集』に収載されていた可能性は極めて高く、この上表文が確かな史料として歴史的にも保証を得て、筆者の年来の課題は解答を得たことになる。

即ち、「謝不許北國居上表」は確かに信頼できる史料であり、大いに活用されてよく、また「遣宿衛學生首領等入朝状」と「請宿衛學生還蕃状」をはじめ、崔致遠の遺文は大いに研究に活用されてよいことが確認される。

【資料Ⅰ】『東文選』に所載の崔致遠の遺文

・（一）内の『桂苑』①は『桂苑筆耕集』巻一を、『海古』は『海印寺古籍』に、『東人』②は『東人之文』四六巻二、『三韓』は『三韓詩鑑』上・中・下、『夾注』は『夾注名賢十抄詩』上・中・下等、それぞれ『東文選』に先行する文集に編集されていることを示す。『桂苑』と『海古』を除く他は『崔致遠文集』に初出していたと判断される。

・（二）外の↓『佛古』は『佛國寺古今歴代記』に、↓『孤雲』③は『孤雲先生文集』巻三に、↓『孤続』は『孤雲先生続集』に編集される作品であることを示す。

○巻四「五言古詩」

↓『孤雲』①

・ 寓興（『三韓』上）↓『孤雲』①

・ 蜀葵花（『三韓』上）↓『孤雲』①

・ 江南女（『三韓』上）↓『孤雲』①

・ 古意（『三韓』上）↓『孤雲』①

↓『孤雲』①

・ 贈雲門蘭若智光上人（『三韓』上）↓『孤雲』①

・ 題雲峰寺（『三韓』上）↓『孤雲』①

・ 旅遊唐城有先王樂官將西歸夜吹數曲戀恩悲泣以詩贈之（『三韓』上）↓『孤雲』①

○巻九「五言律詩」

・ 長安旅舍與于慎徽長官接隣有寄（『三韓』上）

○巻十二「七言律詩」

・ 登潤州慈和寺上房（『三韓』中、『夾注』中）↓

『孤雲』①

・秋日再經盱眙縣寄李長官（『三韓』中）↓『孤雲』①

・送吳進士鬱歸江南（『三韓』中）↓『孤雲』①

・春曉偶書（『三韓』中）↓『孤雲』①

・暮春即事和顧雲友使（『三韓』中、『夾注』中では「和顧雲支使暮春即事」）↓『孤雲』①

・陳情上太尉（『三韓』中）

・和張進士喬村居病中見寄喬字松年（『夾注』中）

↓『孤雲』①

・酬楊瞻秀才（『桂苑』②、『夾注』中）

・野燒（『桂苑』②）

○卷十九「五言絕句」

・秋夜雨中（『三韓』上）↓『孤雲』①

・郵亭夜雨（『三韓』上）↓『孤雲』①

「七言絕句」

・途中作（『三韓』中）↓『孤雲』①

・饒州鄱陽亭（『三韓』中）↓『孤雲』①

・山陽與鄉友話別（『三韓』中）↓『孤雲』①

・題芋江驛亭（『三韓』中）↓『孤雲』①

・春日邀知友不至因寄絕句（『三韓』中）↓『孤雲』①

雲』①

・留別西京金少尹峻（『三韓』中）↓『孤雲』①

・贈金川寺主（『三韓』中）↓『孤雲』①

・贈梓谷蘭若獨居僧（『三韓』中）↓『孤雲』①

・黃山江臨鏡臺↓『孤雲』①

・題伽耶山讀書堂↓『孤雲』①

○卷三十一「表箋」

・賀改年號表（『桂苑』①）

・賀通和南蠻表（『桂苑』①）

・賀建王除魏博表（『桂苑』①）

・賀封公主表（『桂苑』①）

・賀殺黃巢徒伴表（『桂苑』①）

・賀處斬草賊旣能表（『桂苑』①）

・賀取復京闕表（『桂苑』①）

・賀殺黃巢表（『桂苑』①）

・賀降德音表〔桂苑〕①

・賀廻駕日不許進歌樂表〔桂苑〕①

・新羅賀正表〔東人〕① ↓ 『孤雲』①

○卷三十三「表箋」

・謝加太尉表〔桂苑〕②

・謝示南蠻通和事宜表〔桂苑〕②

・謝立西川築城碑表〔桂苑〕②

・謝賜御製眞贊表〔桂苑〕②

・謝御扎衣襟并國信表〔桂苑〕②

・謝加侍中表〔桂苑〕②

・謝加侍中兼實封表〔桂苑〕②

・謝嗣位表〔東人〕① ↓ 『孤雲』①

・謝恩表〔東人〕① ↓ 『孤雲』①

・謝賜詔書函表〔東人〕① ↓ 『孤雲』①

・謝不許北國居上表〔東人〕① ↓ 『孤雲』①

○卷三十九「表箋」

・百濟遣使朝北魏表〔東人〕①

・起居表〔東人〕① ↓ 『孤雲』①

○卷四十一「表箋」

・請巡幸江淮表〔桂苑〕②

・第二表〔桂苑〕②

○卷四十三「表箋」

・讓位表〔東人〕① ↓ 『孤雲』①

・讓官請致仕表〔桂苑〕②

○卷四十五「啓」

・上襄陽李相公讓館給啓〔東人〕⑬ ↓ 『孤雲』①

・初投獻太尉啓〔桂苑〕⑬、〔東人〕⑬

・再獻啓〔桂苑〕⑬、〔東人〕⑬

・謝許歸覲啓〔桂苑〕⑳

・謝再送月料錢啓〔桂苑〕⑳、〔東人〕⑬

・獻詩啓〔桂苑〕⑰

・長啓〔桂苑〕⑱

・賀除吏部侍郎啓〔桂苑〕⑱

○卷四十七「狀」

・謝詔狀〔桂苑〕③

・謝就加侍中兼實封狀〔桂苑〕③

- ・奏請叛卒鹿晏弘授興元節度使狀〔『桂苑』⑤〕
- ・賀殺黃巢賊徒狀〔『桂苑』⑥〕
- ・謝加侍中兼實封狀〔『桂苑』⑥〕
- ・謝生料狀〔『桂苑』⑦〕
- ・謝職狀〔『桂苑』⑦〕
- ・謝借宅狀〔『桂苑』⑦〕
- ・出師後告辭狀〔『桂苑』⑦〕
- ・謝令從軍狀〔『桂苑』⑦〕
- ・謝借舫子狀〔『桂苑』⑦〕
- ・謝許奏薦狀〔『桂苑』⑦〕
- ・謝加料錢狀〔『桂苑』⑧〕
- ・謝衣段狀〔『桂苑』⑧〕
- ・謝借示法雲寺天王記狀〔『桂苑』⑧〕
- ・謝示延和閣記碑狀〔『桂苑』⑧〕
- ・謝改職狀〔『桂苑』⑧〕
- ・謝探請料錢狀〔『桂苑』⑧〕
- ・獻生日物狀〔『桂苑』⑧〕
- ・又狀〔『桂苑』⑧〕
- ・海東人形參一軀・海東實心琴一張〔『桂苑』⑮〕
- ・蓬萊山圖一面〔『桂苑』⑮〕
- ・人參三斤 天麻一斤〔『桂苑』⑮〕
- 〔端午節送物狀〕
- ・織成鞍幪一條〔『桂苑』⑮〕
- ・雪扇一柄〔『桂苑』⑮〕
- ・謝新茶狀〔『桂苑』⑮〕
- ・謝櫻桃狀〔『桂苑』⑮〕
- ・謝冬至料狀〔『桂苑』⑮〕
- ・謝寒食節料狀〔『桂苑』⑮〕
- ・謝社日酒肉狀〔『桂苑』⑮〕
- ・謝正段狀〔『桂苑』⑮〕
- ・遣宿衛學生首領等入朝狀〔『東人』①〕↓『孤雲』①
- ・奏請宿衛學生還蕃狀〔『東人』①〕↓『孤雲』①
- ・新羅王與唐江西高大夫湘狀〔『東人』①〕↓
- 〔『孤雲』①〕

- ・ 與禮部裴尚書瓚狀〔『東人』①〕↓〔『孤雲』①〕
- ・ 與青州高尚書狀〔『東人』①〕↓〔『孤雲』①〕

○卷四十九「檄書」

- ・ 檄黃巢書〔『桂苑』⑪〕
- ・ 招趙璋書〔『桂苑』⑪〕
- ・ 告報諸道會兵書〔『桂苑』⑪〕
- ・ 告報諸道徵促綱運書〔『桂苑』⑪〕

○卷五十「贊」

- ・ 華嚴佛國寺繡釋迦如來像幡贊并序〔『佛古』⑤〕の「王妃金氏（金大城三世孫女也）爲考繡釋迦如來像幡讚并序」の前半と、後半は「大華嚴宗佛國寺阿彌陀像（真興王所鑄佛）讚并序」の後半を接続した文と一致、↓〔『佛古』⑤〕、↓〔『孤雲』①〕

○卷五十七「書」

- ・ 答浙西周司空書〔『桂苑』⑪〕
- ・ 答江西王尚書書〔『桂苑』⑪〕
- ・ 答徐州時溥書〔『桂苑』⑪〕

- ・ 答襄陽郟將軍書〔『桂苑』⑪〕

- ・ 浙西周司空書〔『桂苑』⑪〕

- ・ 浙西護軍焦將軍書〔『桂苑』⑪〕

- ・ 與昭儀成璘書〔『桂苑』⑫〕

- ・ 與廬江縣令李清書〔『桂苑』⑫〕

- ・ 與淮口鎮李質書〔『桂苑』⑫〕

- ・ 與光州李罕之書〔『桂苑』⑫〕

- ・ 上滑州都統王令公書〔『桂苑』⑧〕

○卷五十八「書」

- ・ 上鄭畋相公書〔『桂苑』⑦〕

- ・ 第二書〔『桂苑』⑦〕

- ・ 上史館蕭遵相公書〔『桂苑』⑦〕

- ・ 上度支裴徹相公書〔『桂苑』⑦〕

- ・ 與前大原鄭從讜尚書書〔『桂苑』⑦〕

- ・ 上吏部裴瓚尚書書〔『桂苑』⑦〕

- ・ 第二書〔『桂苑』⑦〕

- ・ 與盧紹紹給事書〔『桂苑』⑦〕

- ・ 上壁州鄭凝績尚書書〔『桂苑』⑦〕

- ・ 上湖南閔頊尚書書（『桂苑』8）
- ・ 與幽州李可舉書（『桂苑』8）
- ・ 答浙西周寶司空書（『桂苑』11）
- ・ 與蕭邁相公書（『桂苑』10）
- ・ 第二書
- ・ 與田軍容書（『桂苑』10）
- ・ 移浙西陳司徒廟書（『桂苑』16）
- ・ 賀除吏部侍郎書（『桂苑』19）
- ・ 與金部郎中書（『桂苑』19）
- ・ 與客將書（『桂苑』19）
- ・ 答裴拙庶子書（『桂苑』19）
- ・ 謝高祕書示長哥書（『桂苑』19）
- ・ 謝元郎中書（『桂苑』19）
- ・ 謝周繁秀才以小山集見示書（『桂苑』19）
- ・ 與壽州張常侍書（『桂苑』19）
- ・ 與假牧書（『桂苑』19）
- 卷六十四「記」
- ・ 西川羅城圖記（『桂苑』16）
- ・ 補安南錄異圖記（『桂苑』16）
- ・ 新羅迦耶山海印寺善安住院壁記（『海古』）
↓
『孤雲』①
- ・ 新羅壽昌郡護國城八角燈樓記（『海古』）
↓
『孤雲』①
- ・ 新羅迦耶山海印寺結界場記（『海古』）
↓
『孤雲』①
- 卷百六「牒」
- ・ 楚州刺史張雄將軍牒（『桂苑』13）
- ・ 授高霸權知江州軍州事牒（『桂苑』13）
- ・ 許勅妻劉氏封彭城郡君牒（『桂苑』13）
- ・ 請節度判官李綰大夫充副使牒（『桂苑』13）
- ・ 請副使李大知留後牒（『桂苑』13）
- ・ 請高彥休少府充塩鐵巡官牒（『桂苑』13）
- ・ 請泗州于尚書充都指揮使牒（『桂苑』13）
- ・ 右司馬王槩端公攝塩鐵出使巡官牒（『桂苑』13）
- ・ 前邵州録事參軍顧玄夫攝桐城縣令牒（『桂苑』13）
- ・ 海陵縣令鄭杞牒（『桂苑』13）

- 前宣州當塗縣令王翱攝楊子縣令牒 (『桂苑』 13)
- 柳孝讓攝滁州清流縣令牒 (『桂苑』 13)
- 諸葛殷知權酒務牒 (『桂苑』 13)
- 李昭望充奉國巡官牒 (『桂苑』 13)
- 柴巖充洪澤雨塘巡官楚州營田牒 (『桂苑』 13)
- 許權攝觀察衙推充洪澤巡官牒 (『桂苑』 13)
- 臧澣知鹽城監事牒 (『桂苑』 13)
- 趙詞攝和州刺史牒 (『桂苑』 13)
- 宋再雄差充水軍都知兵馬使牒 (『桂苑』 14)
- 許勍授廬州刺史牒 (『桂苑』 14)
- 孫端權知舒州軍州事牒 (『桂苑』 14)
- 王處順充塩城鎮使牒 (『桂苑』 14)
- 張宴充廬州軍前催陳使牒 (『桂苑』 14)
- 安再榮管臨淮都牒 (『桂苑』 14)
- 呂用之兼管山陽都牒 (『桂苑』 14)
- 獬豸都將牒 (『桂苑』 14)
- 宿松縣令李敏之充招討都知兵馬使牒 (『桂苑』 14)
- 張雄充白沙鎮將牒 (『桂苑』 14)
- 安再榮充行營都指揮使牒 (『桂苑』 14)
- 曹鵬知行在進奏補充節度押衙牒 (『桂苑』 14)
- 朱祝大夫起復牒 (『桂苑』 14)
- 上都昊天觀牒 (『桂苑』 14)
- 卷百九「祭文」
 - 祭五方文 (『桂苑』 16)
 - 築羊馬城祭土地文 (『桂苑』 16)
 - 祭楚州陣亡將士 (『桂苑』 16)
 - 寒食祭陣亡將士 (『桂苑』 16)
 - 祭嶼山神文 (『桂苑』 20)
- 卷百十「疏」
 - 求化修諸道觀疏 (『桂苑』 16)
 - 求化修大雲寺疏 (『桂苑』 16)
- 卷百十四「齋詞」
 - 應天節齋詞 (『桂苑』 15)
 - 又 (『桂苑』 15)
 - 又 (『桂苑』 15)
 - 上元黃籙齋詞 (『桂苑』 15)

注

- ・ 中元齋詞（『桂苑』¹⁵）
 - ・ 下元齋詞（『桂苑』¹⁵）
 - ・ 又（『桂苑』¹⁵）
 - ・ 上元齋詞（『桂苑』¹⁵）
 - ・ 中元齋詞（『桂苑』¹⁵）
 - ・ 齋詞（『桂苑』¹⁵）では「下元齋詞」
 - ・ 黄錄齋詞（『桂苑』¹⁵）
 - ・ 攘火齋詞（『桂苑』¹⁵）
 - ・ 天王院齋詞（『桂苑』¹⁵）
 - ・ 爲故昭義僕射齋詞（『桂苑』¹⁵）
 - ・ 又（『桂苑』¹⁵）
- (1) 初載は末松保和博士古稀記念会編『古代東アジア史論集』下巻（吉川弘文館、一九七八年三月。後に『新羅国史の研究』（二〇〇二年二月、吉川弘文館）に所収）
- (2) 孫進己・馮李昌主編『渤海史論著滙編』（吉林人民出版社、一九八七年七月）、梁玉多主編『渤海史論集』（中国文史出版社、二〇一三年八月）
- (3) 張日圭「『桂苑筆耕集』의 構成斗性格—崔致遠의 在唐生涯와 관련하여—」（于松趙東杰先生停年紀年論叢・韓國史学史研究）一九九七年八月
拙稿「新羅の文人官僚崔致遠の『生』と『思想』」（濱田耕策編著『古代東アジアの知識人 崔致遠の人と作品』九州大学出版会、二〇一三年二月）
- (4) 李康來『三国史記典據論』（民族社、一九九六年一月）
- (5) 『東文選』卷八十四、崔澹「東人文序」、東人四六序
- (6) 『高麗名賢集』五・「東人之文四六」・「解題」（千惠鳳）（一九八〇年七月、成均館大東文化研究院）。尚『東人之文四六』（啓明大学校童山図書館、二〇〇九年二月）は二三五四年頃に晋州牧で刊行された巻七〜九までの零本の影印本である。

- 朴漢男「十四세기 崔濯의 『東人之文四六』 편찬과 그 의미」(『大東文化研究』第三十二輯、成均館大學校大東文化研究院、一九九七年十二月)
- (7) 金甲起譯註『三韓詩龜鑑』(梨塔文化出版社、一九九八年一月)。
- (8) 『夾注名賢十抄詩』(韓國學資料叢書三十九、韓國學中央研究院、二〇〇九年二月)
高橋亨「崔致遠 夾註十鈔詩 一名 名賢十鈔」(『朝鮮』第二九三號、一九三九年十月)、芳村弘道「十抄詩・夾注名賢十抄詩」(汲古書院、二〇一一年三月)、及び芳村「朝鮮本『夾注名賢十抄詩』の基礎的考察」(『學林』第三十九號、二〇一四年三月)
- (9) 竹村則行「新羅・崔致遠と晚唐・顧雲の交遊について」(濱田前掲編著書)
- (10) 解題(李基白)
- (11) 藤本幸夫「日本現存朝鮮本研究 集部」(京都大學學術出版會、二〇〇六年二月)、濱田耕策「崔致遠撰『桂苑筆耕集』の印出と伝来について」(濱田編「崔致遠撰『桂苑筆耕集』に関する総合的研究」(九州大學教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクトB―二、平成十三～十四年度) 報告書、平成十五年三月)
- (12) 金子彦二郎「平安時代文学と白氏文集―句題和歌・千載佳句研究編―」(培風館、一九四三年十二月)
川口久雄「平安朝漢文学史の研究」上・下(明治書院、一九六一年三月)
楊慶華・李充陽「中韓朝・唐代友好詩歌選粹」(中國書籍出版社、二〇〇五年十月)
静永健「千載佳句」所収崔致遠逸詩句初探」(濱田前掲編著書。初載は静永「唐詩推敲―唐詩研究のための四つの視点―」(研文出版、二〇一二年十月)
- (13) 川西裕也「桂苑筆耕集序」(書き下し文・日本語訳)(濱田前掲編著書)
- (14) 前注(13)
- (15) 前注(12)
- (16) 池内宏「高麗朝の大蔵経」(『滿鮮研究』中世第二冊、吉川弘文館、一九七九年五月三版。初出は『東洋學報』第十三卷第三号「一九三三年十二月」、同第十三卷第三号「一九二四年七月」、末松保和「新編諸宗教蔵總録」(末松保和朝鮮史著作集六『朝鮮史と史料』吉川弘文館、一九九七年一月。初出は「高麗文獻小録」(三)―新編諸宗教蔵總録―)、『青丘學叢』十二、一九三三年五月)
- (17) 関泳珪「佛國寺古今歴史代記解題」(『佛國寺華嚴寺事蹟』(考古美術同人會、考古美術資料第七輯、一九六五年三月) 初出は

『學林』第三輯、一九五四年七月)

- (18) 崔英成註解『註解四山碑銘』(亜細亜文化社、一九八七年十二月)、李佑成校譯『新羅四山碑銘』(亜細亜文化社、一九九五年九月)、金知見『四山碑銘集註』(韓國精神文化研究院、一九九四年五月)及び、浅川伯教が木浦で購入した『四山碑銘』を今西龍が昭和六年一月八日に借り受けて書写した『四山碑銘』が天理大学図書館に保管されている。尚、近藤浩一「新羅末期の王土思想と社会変動―崔致遠の『四山碑銘』の検討を中心に―」(『東京大学日本史学研究室紀要』第十号、二〇〇六年三月)は日本の学界において、『四山碑銘』を対象とした希有なかつ意欲的な成果である。

- (19) 「先生。十二人唐。十八登第。文名大振。二十八東還。乃僖宗光啓元年。而定康王嗣位之初載也。至翌年。僖宗遣使。特命先生。撰中興功德頌一卷」尚、『三國史記』の紀年では、定康王の即位初年は光啓二年(八八六)とあって、この『碑銘并序』の注とは一年の差がある。

- (20) 藤田亮策(遺稿)「海印寺雜板巧」(一)(二)『朝鮮學報』第一三八・九輯、一九九一年一、四月)、拙稿「海印寺の古籍中の崔致遠遺文」(科学研究費助成金(基盤B)(平成十七年度)十八年度)報告書『朝鮮古代の文人官僚・崔致遠の人と作品に関する歴史文学的研究』)

- (21) この佛國寺事蹟が一然の撰となることについては、木村静雄「佛國寺事蹟石刷に就て」(『佛國寺華嚴寺事蹟』(考古美術同人會、考古美術資料第七輯、一九六五年三月))尚、この一然は『三國遺事』の撰者の一然禪師とは別人である。

- (22) 前掲の『佛國寺華嚴寺事蹟』

- (23) 張日圭「崔致遠の儒教的政治理念と社会改革案」(濱田前掲編著)は「時務十余条」について、崔致遠の作品から窺われる儒教に基づく政治理念からその内容を構想している。

- (24) 今西龍「新羅崔致遠傳」(『新羅史研究』国書刊行会、一九七〇年九月)

- (25) 柴田篤「経学隊仗」の成立と崔致遠(濱田前掲編著)

(本稿は前掲注(11)のプロジェクト「崔致遠撰『桂苑筆耕集』に関する総合的研究」の成果である「東文選」と崔致遠遺文」を大幅に補正、追加し整理したものである。)